

編集後記

暖冬異変のためか春のおとずれもいつもより早い感じで、本年も第4号をお送りすることになった。

本号では特集として「熱傷のリハビリテーション」をとりあげた。まず、大矢氏のわが国での熱傷患者の統計により、その罹災者の多いのおどろかされる。穴沢氏らは熱傷の初期治療を解説し、そのなかで「瘢痕による醜形と機能障害は熱傷治療上の大きな問題となっており、従来、救命できれば瘢痕は致し方ないと言われていたが、患者にとってはむしろ死に勝る苦しみである」とし、いみじくも本号の特集の重要性を指摘して下さった。リハビリ医療上で最も問題となる変形拘縮、瘢痕について、牧野氏は観血的治療法を、千野氏は保存的な方法を中心にのべているが、両者の効用を最大限に利用することが大切であろう。これらのことはつづく吉村氏ら、土肥氏ら、安田氏ら、関谷氏らの症例報告に示されている。

しかしながら、わが国においては熱傷患者が総合的なリハビリ医療をうけられる率は少

なく、各専門医療分野の熱傷に対する医療体制の遅れがうきぼりにされた。と同時に、今後の課題も提起されたといえる。

熱傷の症例報告4編は応募原稿によるものであり、各氏に御礼申し上げるとともに、今後も本誌の編集にあたってこのような形式をとっていきたいと考える。

研究論文も最近多くなり、内容のあるものが増えた。仲田氏らのアテトーゼCP児の環軸椎動揺性の論文もよみごたえのあるものである。

江口氏らのCP児の食事動作訓練についての講座は、氏の日頃のCP児医療に研鑽される姿を彷彿させるものであり、二木、上田両氏のヨーロッパでのリハビリ実態報告書は、興味深いものであると同時に、そのエネルギーな探求力に敬服する。

文末になったが、松井氏の巻頭言はリハビリ医療者全員の関心事である。以上、今月も、実のある内容をもった「総合リハ」をおとどけすることができたと思う。

(千野 直一)

次号予告 (第7巻第5号)

特集 リハビリテーションにおけるリスクとその対策

片麻痺のリハビリテーションにおけるリスクとその対策……………鹿教湯病院 藤 田 勉

四肢麻痺のリハビリテーションにおけるリスクとその対策……………神奈川リハセンター 安 藤 徳 彦

進行性筋ジストロフィー症のリハビリテーションとその対策……………国療西多賀病院 湊 治 郎

慢性関節リウマチのリハビリテーションにおけるリスクとその対策……………中伊豆温泉病院 間 得 之

肺気腫のリハビリテーションにおけるリスクとその対策……………虎の門病院 谷 本 普 一

講座 リハビリテーション医のための循環器入門 (5)

(慢性呼吸器疾患、肺性心)……………埼玉医大 土 肥 豊

リハビリテーションにおける治療 (5)

(頸髄損傷の合併症に対する治療)……………産業医大 緒 方 甫

一頁講座 リハビリテーション用語集・11……………国立大阪南病院 博 田 節 夫

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
土 屋 弘 吉
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
荻 島 秀 男
小 野 啓 郎
加 倉 井 周 一
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
斉 藤 正 也
沢 村 誠 志
武 智 秀 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
間 得 之
長 谷 川 恒 雄
橋 倉 一 裕
福 井 関 彦
三 島 博 信
渡 辺 英 夫
飯 田 卯 之 吉
田 中 照 子
小 川 孟
野 村 欽
小 島 蓉 子
笹 沼 澄 子
鈴 木 明 子
高 田 玲 子
林 玉 子
土 屋 和 夫
松 村 秩
(以上五十音順、敬称略)

(細田、鹿島)